

乳がん・子宮がんについて

乳がん



乳がんとは

乳がんの約90%は乳管から発生し、乳管がんと呼ばれます。小葉から発生する乳がんが約5～10%あり、小葉がんと呼ばれます。(図1)

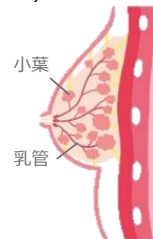
乳がんが進行するとリンパ節や骨、肺、肝臓など、乳房以外の臓器にがん細胞が転移して、様々な症状を引き起こします。

40歳後半から60歳頃がピークとなっていますが、乳がんにかかる人は年々増加しています。

一生のうちにおよそ11人に1人が乳がんと診断され、乳がんになった5人に1人が命を失っています。

しかし、乳がんは早期に見つかり治療した場合、90%以上は治ります。

(図1)



乳がんの要因

- ・初経年齢が早い（11歳以下）
- ・閉経年齢が遅い（55歳以上）
- ・出産歴がない
- ・初産年齢が遅い（30歳以上）
- ・授乳歴がない
- ・肥満
- ・喫煙
- ・飲酒習慣
- ・一親等の乳がんの家族歴
- ・良性乳腺疾患の既往歴

乳がんの症状

早期の段階では自覚症状に乏しいとされる乳がんですが、病期の進行とともに症状が現れます。

- ・しこり
- ・乳房の変形
- ・左右差がある
- ・えくぼのようなへこみ
- ・痛み
- ・ひきつれ
- ・ただれや湿疹
- ・赤みや腫れ、熱っぽさ
- ・異常な分泌物

乳がん検診を受けましょう

大切な命と乳房を守るために、**年に1回乳がん検診を受けること**と、**月に1度のセルフチェック**が大切です。

年齢により、推奨する乳がん検診の検査方法に違いがありますので、「乳がん検診・子宮がん検診」ページでご確認ください。

セルフチェックでしこりやひきつれ、ただれ、異常な分泌物などが見つければすぐに受診しましょう。

子宮がん



子宮がんとは

子宮がんは、がんが発生する場所によって、2種類に分けられます。(図2)

●子宮頸がん

子宮頸部の入り口である外子宮口のあたりに発生する事が最も多いがんです。

通常、子宮頸がんは一定の時間をかけてゆっくりと増殖します。

がんが発見される前の段階として、子宮頸部の組織にがん化進行する可能性がある細胞が増えていきます（異形成）。

最も多い年代は40代ですが、20歳前半から増えてくるため、若い人も注意が必要です。

一生のうちにおよそ73人に1人が子宮頸がんと診断されています。

●子宮体がん

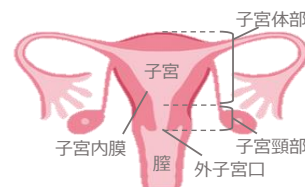
子宮体がんは、その95%は子宮内膜から発生する事から、子宮内膜がんとも呼ばれます。

40歳後半から増加し、50歳代から60歳代で最も多くなっています。

近年では、20歳代後半以降の女性にも増えていて、若年化が問題となっています。

最近、日本の成人女性に増えてきているがんのひとつです。

(図2)



子宮がんの要因

●子宮頸がん

ヒトパピローマウイルス（HPV）に持続的に感染する事と考えられています。

HPVは性交渉により感染し、80%の女性が一生に一度は感染すると言われる、ありふれたウイルスです。

通常はウイルスに感染しても、体に備わっている免疫機能により自然に排除されます。

しかし、ウイルスが排除されずに長期間感染が続く場合があり、ごく一部の人の細胞ががん化する事があります。

●子宮体がん

原因の8割が女性ホルモン（エストロゲン）の継続的な刺激による発生といわれています。

肥満、閉経が遅い、妊娠・出産経験がない（少ない）などの場合、発症のリスクが上がります。

子宮がんの症状

●子宮頸がん

初期には自覚症状がありません。進行すると以下の症状が現れます。

- ・月経以外の出血（不正出血）
- ・性交渉による出血
- ・茶褐色・黒褐色のおりものが増えるなどのおりものの異常
- ・足腰の痛み
- ・血の混じった尿

●子宮体がん

初期から以下の症状が現れます。

- ・月経以外の出血（不正出血）
- ・長期間、月経不順がある
- ・閉経後に不正出血がある
- ・おりものに血が混じる
- ・月経時の出血が多い

子宮がん検診を受けましょう

子宮がん検診とは、一般に子宮頸がん検診のことです。

子宮がんを発症しても、初期はほとんど自覚症状がありません。

2年ごとに検診を受ければ、がんになる前の異形成の段階で見つけることが可能です。

また、子宮体がん検診を希望される場合は、補助金制度（対象年齢/利用条件あり）をご利用ください。